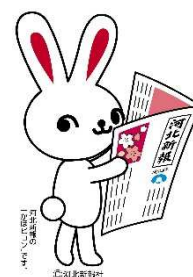


2026年内定者アンケート



①河北新報社を知ったきっかけ

□実家で購読していた、地方紙合同セミナーをきっかけに

▶実家でとっていた新聞が河北新報だったので、物心ついた頃から河北新報社のことは知っていました。また、河北新報社が携わっていたサイエンスショーやオンライン音楽祭に参加した経験があるため、さまざまなところでご縁があったように思います。

▶実家で朝刊を購読しています。毎朝家族で回して読んでおり、私にとって一番身近な新聞社でした。

▶祖父母が購読していたことがきっかけ。学生時代には授業でも度々活用しており、幼い頃から身近に河北新報があった。

▶仙台市出身なので、学校の図書館等で紙面を目にする機会も多く、馴染みがありました。初めて知ったのは小学生の頃だと思います。

▶初めて河北新報を見たのは、宮城県の高校に転校してきたときです。スポーツが盛んな学校だったため、河北新報に友人の大会結果や記録が掲載されているのを高校で目しました。身近な人の活躍が新聞に載っていることをきっかけに、河北新報を知りました。

▶母の実家が仙台市にあり、帰省の度に祖父母が河北新報と石巻かほくを読んでいるのを見ていました。

▶宮城県内の親戚の家で見たことがあり、名前は知っていました。本格的に意識したのは就職活動で、地方紙合同のオンラインセミナーで話を聞いて興味を持ちました。

▶一番初めは「河北新報のいちばん長い日」を読んだことがきっかけです。その後、東京で行われた地方紙の合同説明会に足を運んだことで、河北新報への理解が深まりました。

▶大学の図書館で自分の知らない新聞があったので手に取って読んでみたことです。

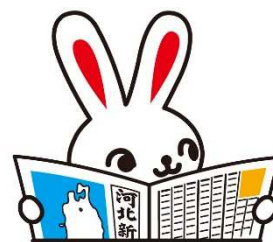
▶マイナビでインターンシップを探していた際に知った。

▶以前から新聞記者になりたいという夢があったので、東北新聞6社合同仕事研究セミナーに参加した。河北新報社のブースを訪れ、会社説明を聞き、興味を持った。その後、人事部の方に個別相談をしたいと伝えた。個別相談では、河北新報社で働き始めて間もない若手女性記者の方と話すことができた。この会社で記者として働く自分の姿を具体的にイメージすることができたので、良い機会だったと感じている。より記者になりたいという思いが強まった一日だった。

▶河北新報を初めて知ったのは、2020 年、コロナ禍の真っ只中に仙台へ引っ越してきた頃である。それまで東北のことをほとんど知らないまま一人で暮らし始めたため、まずは身の回りで何が起きているのかを知ろうと、Twitter や LINE など地域の情報を探していた。その中で何気なく参照していたのが河北新報であった。紙面を初めて見たのは、学部一年生の後半、規制が緩和されて大学図書館へ行くようになってからである。それ以降、図書館に立ち寄った際にはできる限り新聞に触れるようになり、河北新報も継続的に読むようになった。最初は生活圏の情報を得るためにデジタル上で知った新聞であったが、次第に紙面にも触れるようになり、少しずつその存在が身近なものになっていった。

▶大学進学を機に仙台に住み始め、街中で河北新報を目にするようになったことが最初のきっかけです。その後、大学の「キャリア教育特別講義：河北新報・東北を拓く新聞論」という講義のなかで社員の方々のお話を聞き、より強く意識するようになりました。

②志望した理由、動機



□宮城・東北を盛り上げたい

▶夏季インターンシップにて河北新報社の社是である「東北振興 不羈独立」に魅了されたからです。地方紙として、宮城に根付いた新聞として何をすべきなのか、報道機関としてどう東北を盛り上げていくのか、というのが社是から強く感じました。

▶自分が通っている大学の授業をきっかけに、地元のために自分にできることを考えるようになった。そんな中、河北新報社のインターンシップに参加し、地域を盛り上げようとする社員の方の姿に感銘を受けた。情報発信を通して地域の魅力を広め、地域の方が地元を誇りに思えるような環境づくりをしたいと考え、志望した。

▷東北の新聞社が集まる説明会に参加した際に、「新聞社は小さな声を拾うことが出来る会社」や「地域と深く関わることができる会社」という言葉を聞き、自分の興味・関心とリンクしていると思い、志望しました。それに加え、インターンで体験した主催事業のサポートや企画を考えるプログラム、模擬営業にやりがいを感じたのも動機の一つです。

▷大学でまちづくりや地域の自治について学ぶなかで、地域に根ざした情報を伝える地方紙の役割に興味を持ちました。河北新報社のインターンシップを通して「読み手にどうやってほしいか」を考える大切さを学び、特に情報を実際の行動へと結びつける防災への姿勢に強く惹かれました。新聞を通して、読者が自らの生活や地域社会をより良くしようと思えるきっかけを作りたいと考え、志望しました。

▷大学での勉強を通じ、社会問題の解決には報道が大きな役割を担っていると実感する場面がありました。そこから報道に関わる仕事に興味を持ち、記者を目指すようになったのが最初のきっかけです。また、私は大学で地方自治論の研究をしてきたので、同じ地域を継続的に取材できる地方紙が自分には合っていると考えようになりました。そのなかでも、やはり地元である宮城・東北に貢献したいという気持ちが強く、河北新報社を志望しました。

□記者を目指して

▷記者には絶対になりたいという思いがありました。以前、報道機関でアルバイトをしていた際、お世話になった記者の「誰に向けて記事を書いているのか分からないことがある」という言葉が印象に残りました。そこから、読者の顔が見え、「誰のために書いているのか」が明確な地方紙の報道姿勢に惹かれるようになりました。

▷小さい頃から書くことが好きで、その上で人と関わる仕事がしたかったので、記者という職業に興味を持っていました。国語科の教員になることも考えていた中で、河北新報社のインターンに参加させていただいたところ、非常に雰囲気良く、記者として働くことのやりがいを強く感じました。働いていく中で、他の職では経験できない様々なことを経験できるということもとても魅力的でした。

▷私が記者を目指したきっかけの一つに、東日本大震災がある。そのため、震災時にどのような取り組みをしていたか、現在はどのように震災報道に取り組んでいるかという点を重視して、志願する新聞社を探していた。多くの新聞社が3月11日に合わせて震災関連の記事を掲載する中で、河北新報社はほぼ毎日震災関連の記事を書いていることに気づいた。その後、『河北新報のいちばん長い日』という本を読んだ。被災地の新聞社としての使命を果たそうと奮闘している姿に感銘を受け、私もここで働きたいと思うようになった。

▷大学を通じて学生記者の企画に参加し、記者という仕事の面白さや、地域への貢献度の高さに魅力を感じたことがきっかけです。また、東日本大震災の被災地にある新聞社として、防災報道に力を入れている点にも強く惹かれました。大学では地域政策について学んでおり、特に災害時の公民連携や復興過程における課題について専攻しています。これまでの学びを生かし、地域に還元していきたいという思いと、河北新報社の報道姿勢が重なったことから、志望しました。

▷毎日異なる出来事や人と向き合い、日々新しい仕事に取り組むことのできる記者という職業に憧れがあったからです。また、将来は地元で働きたいという思いもありました。ちょうど『過疎ビジネス』が出版された時期に、大学の教授から河北新報を勧めていただいたことも、志望するきっかけの一つとなりました。

▷地域の方々に寄り添いながら当事者意識を持って社会と向き合い、見過ごされがちな違和感や知られていない現実に光を当てたいとの思いから志望しました。大学の部活動で学生新聞の制作に携わった経験から、課題解決に向けて伴走できる地方紙の記者になりたいと考えるようになりました。数ある地方紙のなかで河北新報社に惹かれたのは、インターンシップを通して、地域の方々との関係性の深さを実感したためです。

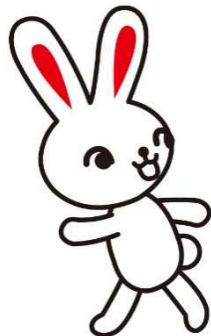
□情報で社会を支える

▷河北新報社を志望するようになった理由は、東北という地域への愛着と、デジタル上の情報のあり方に対する問題意識の二つである。大学・大学院の六年間で東北各地を巡る中で、この地域で暮らす人々や土地に触れ、次第に「東北で働きたい」と思うようになった。そのため、「働くならとりあえず東京」という風潮には、どこか違和感を覚えていた。一方、高校生までは新聞をほとんど読まず、SNS や掲示板から情報を得ており、そこに一種の居場所も感じていた。しかし、大学生活の中で日々のお金のやりくりや家族のことなど、社会の問題を少しずつ自分事として捉えるようになると、又聞きの情報飛び交い、当事者を置き去りにしたまま対立構造だけが空転していくデジタル空間での情報の在り方に疑問を持つようになった。そこで、実際の人や現場に向き合い、一次情報を生み出す「情報のインフラ」に携わりたいと考え、新聞社を志望するに至った。

▷大学でジャーナリズムを学び、情報で社会を支える新聞社の仕事に惹かれたから。また、大好きな地元で人々に寄り添う仕事がしたいと思ったから。

③入社試験で力を入れたこと

□企業研究:新聞を読む、どんな記事を書きたいかを意識する、東北各地に足を運ぶ



▶早期選考に向け、主に自己分析と新聞を読むことに力を入れました。自己分析では、これまでの経験や関心がどのように今後の視点に活きるかを言語化しました。また、実際に河北新報の購読を始め、気になった記事を切り抜き、「なぜこの記事に惹かれたのか」「自分ならどう捉えるか」などを整理しました。

▶自分という人物を知ってもらうために、入社志願書の詳細な作成や面接で自分を表現するにはどんなエピソードやどんな感じで話せばいいのかを考えて入社試験に臨みました。

▶関東在住のため、河北新報は電子版を利用して可能な限り毎日読むようにしていました。並行して就活中は全国紙 4 紙にも目を通し、視点の違いを比較していました。また、面接では自分を大きく見せようとせずに、正直に自信を持って話すことを意識しました。また、直接的な入社試験の対策ではないですが、大学3年時に在来線だけで東北を巡り、東日本大震災の被災地や各県の大きな祭りなどを見に行った経験も、結果的に面接で生きたと思います。

▶新聞社の面接でよく聞かれる質問には、しっかりと答えられるよう準備していた。例えば、「今、気になっているニュースは何か」「自分ならどのような記事を書くか」などだ。自分がES に書いた内容に関連するニュースを整理し、日頃から意識して読むようにしていた。また、自分の地元や大学時代に住んでいた地域のことを調べて面接に臨むと、答えられる質問も多かったと感じる。時事的な話を把握できていると、何にでも対応できる。新聞は毎日、全国紙と地方紙を読み比べていたが、それはとても役に立った。

▶新聞やニュースに日頃から触れ、自分なりの意見を持つことを意識していました。また、面接では自分の経験や考えをわかりやすく伝えられるよう、自己分析に力を入れました。

▶早期選考では面接による評価が中心であったため、直前には大学のキャリアセンターなどで複数回面接練習を行った。自分の話し方の癖を知るとともに、多対一の状況でどのように受け答えするのかを事前に経験しておくことを意識した。また、インターンなどで学んだ新聞制作のプロセスを踏まえ、河北新報と全国紙を読み比べながら、「なぜこのニュースを、こういう切り口で伝えているのか」と作り手の意図を考えるようにした。加えて、自分自身の問題意識を掘り下げ、面接で「これは話したい」と思えるテーマをできるだけ多く見

つけておいた。自分は話を長くしがちなため、それぞれのテーマについて要点を整理しておくことも重要であった。直接的な試験対策ではないが、東北各地を実際に歩き、民宿に泊まり、その土地で暮らす人の話を聞いてきた経験も大きかった。観光の延長ではあるが、土地の暮らしを想像しながら歩いた経験が、自分なりの問題意識をつくることにつながったと感じている。

□面接対策:キャリアセンターで練習、芸能人のインタビューを参考に

▷面接対策に力を入れた。自己分析をして自分のこれまでの活動を振り返り、自分自身を知ることは最低限やらなければならないと思う。対面で話す練習はあまりしなかったが、1人で練習する際は、「インタビューされている時の芸能人」を想像して、話し方を真似してみるなど、工夫しながら練習した。「言いたいことは決まっているけど、なんかうまく話せない。言葉が出てこない」という人はぜひこの練習方法を試してみてほしい。

▷全て自分1人でこなそうとせず、大学のキャリアセンターを頼って面接練習を行いました。基本的なマナーや言葉遣いをあらかじめ学ぶことができたので、当日はリラックスして挑むことができました。扉の開け方や目線、手や鞆の位置など実際やってみなければわからない所作などは確認しておくことをおすすめします。

▷面接対策に力を入れた。ここで働きたいという思いを、自分の言葉で落ち着いて話せるようにした。また、過去の記事を読み返し、自分ならどんな仕事ができるか具体的にイメージした。メディア業界や東北の現状について調べていたことも役に立った。

▷面接に力を入れました。志望動機や入社してからやりたい仕事など、できるだけ具体的に説得力をもって伝えられるよう、ノートに書きだしたり大学のキャリア支援員と練習を行ったりしました。ほかに、河北新報の記事のなかで特に気になったものを切り抜いてノートに保存していました。ニュースや地域に関する知識を深めるだけでなく、取材してみたいテーマや方法を具体化することにも役立ちました。

▷等身大の自分であるように、無理に飾らないようにしていました。

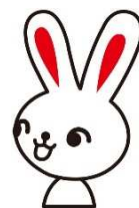
▷面接対策に力を入れました。大学の先輩やキャリアセンターの方に見てもらいながら、大学での経験や自分の強み、志望理由を自分の言葉で伝えられるように練習しました。また、日々のニュースは河北新報オンラインを購読してチェックし、気になる記事に対する自分の考えをすぐに答えられるように対策しました。

▶早めに行動することです。大学3年生の夏には、編集・ビジネス部門両方のインターンシップやセミナーに参加し、早期選考への準備を進めました。

面接の1カ月前からは、毎週異なる先生に面談と、面接練習をお願いしました。また、毎日河北新報を読み、気になったニュースをピックアップするとともに、他の地方紙とも読み比べました。地域密着という点を志望理由にするだけでは「他の地方紙でもよいのではないか」と思われる可能性があるため、他紙との違いを意識しながら、河北新報だからこそできることは何かを考えるようにしていました。

④入社を決めた理由

□インターンで社内・社員の雰囲気を確認



▶インターンシップ中に接した社員の方々から見聞きした報道機関としての責任感と仕事への熱意、そして常に笑顔があふれていたことが決めてでした。

▶他の企業のインターンシップにも参加したが、地元との結びつきの強さや、自分の適性を考えた時に、一番良いと考えたため。

▶会社自体が掲げている目標や理念に共感していたのはもちろんですが、それに加えてインターンシップから最終面接、研修やアルバイトを通して河北新報社に勤めている方々の雰囲気を知り、ここで成長したいと思ったからです。

▶就職活動を通して河北新報を購読し始め、純粋に「紙面が面白い」と感じたからです。また、インターンシップや選考で出会った社員の方々の人柄や、報道や地域づくりに対する姿勢に触れ、ここで自分も働きたいと強く感じたからです。

▶インターンで社員の方々から話を伺う中で、現在の新聞、特に地方紙が置かれている厳しい状況をきちんと受け止めながら、その中で何ができるのかを考え続けている人が多いことに惹かれた。また、インターンの内容も、参加者の能力を測ることより、新聞を少しでも面白く読めるような視点を持ち帰ってもらうことに重きが置かれており、会社として人を「育てる」姿勢を感じた。その後も、宮城県知事選の取材のお手伝いなど、実際の現場に近い経験をさせていただく機会があり、先輩社員から聞いていた若いうちから最前線で経験を積むことができるという河北新報社の特徴を体感することができた。こうした経験や実際に働く人々の姿から、新聞業界を取り巻く環境が厳しいことを踏まえても、河北新報社で仕事することに確かな意義を感じ、入社を決めた。

▷年代・性別・部署を問わず、それぞれの仕事に責任と熱意を持って取り組む社員の方々の姿勢に惹かれたから。雰囲気は温かく、若いうちから活躍できる職場だったことも決め手になった。

□仙台・宮城の暮らしやすさ

▷色々なことを経験できてやりがいを感じることができそうだからというのが一番です。また、個人的に仙台は東京以上に住みやすく良い街だと思っているので、迷うことはあまりありませんでした。

▷他社のインターンと比較して、一番社内の雰囲気が自分に合っていました。社員の方に少し踏み込んだ質問をした際も、良い面だけでなく課題となる面も含めて、包み隠さず具体的に教えてくださったことに信頼感を覚えました。また、東北の忙しくない穏やかな風土も自分の肌に合っていると感じたことも理由の一つです。

□やりたい仕事ができる

▷「地方紙であり、かつ震災報道に精通している新聞社」という点から考えると、河北新報社以外の選択肢は考えられなかった。現在も被災者に寄り添いながら記事を書き続けており、その紙面からも被災者への想いが伝わってくる新聞社だと感じた。さらに、河北新報社の記者が書いた本を読み、地域の人々のために行動する姿を知り、強く心を動かされた。記者には社会をより良くする力があることを学んだ。震災報道に携わりたいという自分の思いを、河北新報社でなら実現できると考え、最終的に入社を決めた。

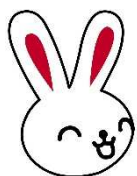
▷宮城・東北の地域に根差し、地域の人々に寄り添いながら情報を届けている点に強く魅力を感じたからです。インターンシップを通して、社員の方々が地域で起きている出来事に真摯に向き合い、ひとつひとつの記事を丁寧につくっている姿を間近で見ることができました。私もこの環境で、地域の人々の声や課題を伝え、地元である宮城・東北に貢献できる仕事がしたいと思い、入社を決めました。

▷選考時から第一志望でしたが、面接を通して、一学生である私に対して社員の方々がまっすぐに向き合ってくださっていると感じたことが大きな決め手になりました。東北出身ではないことに不安を感じたこともありましたが、「東北出身でないからこそ提示できる視点があるのでは」と選考を通じて考え直しました。これから記者として東北という地域をより深く知っていけることへの期待感も入社を決めた理由の一つです。

▷もともと他社の選考を受けておらず、河北新報が第一志望だったからです。迷うことなく入社を決めました。

▶地方紙の記者として働きたい、地元に戻って地域づくりに貢献したい、という二つの目標があったので、その二点がマッチしたことが一番の決め手です。ただ、地元の企業だからというだけではなく、河北新報社は地方新聞社のなかでも特に地域とのつながりが密接だと感じていて、その点も魅力的でした。

また、インターンでの経験も背中を押してくれました。他社のインターンでは、執筆体験をしても一人ひとりに対するフィードバックは少しだけ、ということが多かったのですが、河北新報社のインターンではしっかり原稿に赤を入れてもらえて、就活生のためにここまでしてくれるんだと驚きました。社員の皆様との交流を通じて、志望度がより高まったと感じています。元々第一志望でしたが、採用の通知を受けてからの面談で、面接での良かったところを褒めていただけたのも素直に嬉しく、そこでも入社したい気持ちが強まりました。



⑤入社したらどんな仕事をしてみたいか

行政・福祉分野／震災取材／街ネタ／NIE／広告営業／東北を盛り上げる仕事を

▶まずは記者としての基礎を身につけたい。警察回りや他県の総局勤務などを経験し、実際に地域へ足を運び、人の話を聞く中で、地方紙にできることと、その限界を自分自身で掴みたいと考えている。その上で、デジタル班や政治班で、デジタル空間で起こる議論の空転や分断を、実際の当事者や現場へと差し戻していけるような報道の形を探りたい。高校生まで SNS や掲示板から情報を得て、そこに居場所を感じていた自分だからこそ、現在のデジタル空間が抱える問題について考え続けたいと思っている。将来的には社会班や文化部などで、図書館や伝統芸能など、地域の「文化のインフラ」を支える人々にも目を向けたい。普段は見えにくい場所で地域を支えている人々の営みや課題を取り上げ、それを多くの人と共有できる場をつくっていききたい。

▶得意のコミュニケーション能力や分析能力を生かして企業の目指す理想的な広告宣伝案の提供と提案、多くの人々が手に取ってみてくれるような広告のスタイルの創造などです。

▶イベントへの参加や、新聞の購読を通して、地域の方々が地元を誇りに思えるような仕事をしたい。それらの取り組みを通し、私自身も、自分のする仕事に誇りをもっていられたらいいなと思う。新人ということで、分からない事やうまくいかない事も多いと思うが、成長のために前向きに取り組み、様々なことを吸収していききたい。

▶まずは様々な現場を経験し、関心もスキルも幅広く広げていきたいです。そのうえで、これまで学んできた社会教育や地域福祉に関連するテーマの学びも深めていきたいと考えています。また、遠くに感じがちな社会の大きなテーマであっても、読者の暮らしに引き寄せた身近な視点で形にしていきたいです。

▶地域の皆様と関わり、宮城県をはじめ、東北全体を盛り上げられるような仕事がしてみたいです。また、現在ゼミの最終プロジェクトで震災報道について研究しているので、部門を問わず、地方紙がどのように震災にアプローチしているかを学び、長期にわたり関わっていききたいです。

▶教育に関心があるので、NIE に関する仕事をしたいです。

▶地方行政の取材がしたいです。人口が減少している地方都市にこそ、今の日本が抱える大きな課題が見えるのではないかと考えています。関東で育った自分だからこそ、地方都市で暮らす中で新鮮な視点やたくさんの疑問を見つけられると思います。それを記者として深掘りして、取材に落とし込んでいければいいなと考えています。また、地方紙だからこそできる記事の効果的な拡散の仕方も働きながら考えていきたいです。

▶記者として、災害時の避難所におけるウィメンズヘルスの課題を明らかにし、女性が安心して避難生活を送れる体制を整えたい。大学では「人間の安全保障」をテーマにした授業で、東日本大震災のジェンダー問題について学んだ。また、私自身も避難生活を経験したことから、生理などの女性特有の問題に関しては、男性側の理解も必要だと感じている。災害後の生活に目を向け、適切な支援を行うことは、災害関連死のリスクを減らすことにもつながる。震災時の経験や知識を活かし、記者として社会的弱者を支えたい。

▶現場の声や状況を丁寧に取材し、「この地域で何が起きているのか」を分かりやすく伝えられる仕事がしたいです。読者である地域の皆さんの「知りたい」や「伝えたい」という思いに寄り添い、記者として地域のひとつの力になりたいです。

また、災害や防災に関する報道にも携わりたいと考えています。東日本大震災を経験したひとりとして、災害の被害だけではなく、地域の復興や防災への取り組み、人々の思いまで伝えられる記者になりたいと考えています。災間の時期においても、日常の中に防災意識を落とし込めるような企画記事などを通し、東日本大震災から得た「備え」の教訓を後世の読者へ伝えていきたいです。

▶大学で地方自治論や行政学の研究をしてきたので、県庁や市役所の記者クラブに入っていつか取材したいという気持ちがあります。また、選挙報道にも関心があります。SNS が

普及した現代だからこそ新聞での報道の価値が高まると考えているので、選挙の特集や候補者への取材にも関わりたいです。ただ、それ以外の分野も、東北という地域を見つめるという点では全て共通すると思うので、これまであまり触れてこなかった分野の取材やその他の仕事も経験して、視野を広げたいという気持ちが一番強いです。

▷街ネタ取材を通して、東北で活躍する人々の思いを広く伝えていきたい。首都圏への人口流出が進む中で、地域の魅力を読者が再発見できるような記事を書きたい。さらに、文章だけでなく映像で記録・発信することにも取り組みたい。将来的には、ドキュメンタリー作品のような形で届けることにも挑戦したいと考えている。

▷まずはいろいろな経験を積みたいという気持ちも大きいですが、特に挑戦したいのは、デジタル化などの制度改革の裏で孤立する方々の現状を伝えることです。効率化や利便性が追求されている裏で、制度に取り残されてしまった方々の声を伝えたいと考えています。制度や手続きの変化に戸惑う方々の現状を伝え、議論のきっかけを作りたいです。

▷最近だと「ふとう考」の連載に興味がありました。紙面で伝えるだけでなく、セミナーやイベントなどを通して、実際に人と関わりながら地域の課題を考える企画に携わりたいです。一つのテーマを長い時間をかけて追い続けられることも、地方紙ならではの魅力だと思っています。あとは、ポッドキャストにも関わってみたいです。新聞のデジタル化が進む中で、音声を通じた情報発信の可能性は大きいと感じています。新聞社だからこそできるポッドキャストとは何かを考えながら、若い世代をはじめ、これまで新聞に触れる機会が少なかった人にも届く新しい発信の形をつくりたいです。

⑥就活生へメッセージ

□迷ったらやってみる／インターンや説明会に参加し、社員と会う／選択肢は広く持とう／譲れない部分を大事に／飾らず「自分の言葉」で伝える／焦らず、自分を信じて



▷無理しすぎないことを大前提として、迷った時はとりあえずやってみるといいと思います。「やる」、「やらない」という選択肢がある中で、「やらない」を選ぶことも時には大切ですが、思い切って「やる」を選ぶ精神力は、社会に出てからもきっと役立ちます。就職活動中でもそうでなくても、自由な時間が与えられた時に経験を積んで、色々な価値観に触れてみるといいかもしれません。少なくとも私は、これからもそうやって生きていくつもりです！一緒に頑張りましょう！！

▷「自分軸」や「ガクチカ」、「自己分析」など、自分自身について考えれば考えるほどわからなくなっていくますよね。振り返ってみると、頭の中にあるモヤモヤを言語化するためには、やはりたくさんの人と会って話して、様々な人生に触れることが大事だと思います。どの段階においても、直感的にこれだと決めつけず、出来るだけ自分の選択肢を広げてみてください。その上で、河北新報社とご縁があり、将来同じ場所で働くことができたならとても嬉しいです。体調には十分気をつけて、学生生活も思い切り楽しみつつ、就活も頑張ってください。応援しています。

▷就活は自分の将来や人生において重要な場面です。怖いことや不安なことがあります、一度自分を見つめてどこで何がしたいのかを考えて、多くの企業説明会やインターンシップに応募・参加してみることが成功へのカギなのかも知れません。

▷自分が何に優先度を高く置いているのか深く考えることが重要だと思います。

▷説明会やインターンを通じて社員の皆様とお話しをしたときに、この会社でぜひ働きたい、という思いが強まりました。志望度が高まると試験対策のモチベーションにも繋がると思うので、まずは社員の方に直接出会える場に足を運ぶのが良いと思います！

▷面接を担当するのは、経験豊富な記者の方です。自分の良いところばかりを見せようと取り繕っても、話す中ですぐに見透かされてしまうと思います。

変に着飾る必要はないと思います。とにかく正直に、ありのままの自分に自信を持って臨むことが一番だと思うので、頑張ってください。

▷最初から視野を絞りすぎず、就職活動を通して色々な企業や分野を知ることを楽しみながら進めたことで、より自分の軸が明確になったと感じています。みなさんが納得のいく選択ができることを願っています。

▷不安になることもあると思いますが、これまで自分がやってきたことを信じて、深呼吸をして挑めばきっと大丈夫です。笑顔と自分らしさを忘れずに！応援しています！

▷就職活動では、周りと比べて焦ることもあると思いますが、自分がこれまで経験してきたことや大切にしてきたことを振り返り、「どんな仕事がしたいのか」と考えることが大切だと思います。面接では、きれいな言葉を並べるよりも、自分自身の経験から生まれた考えを自分の言葉で伝えることを意識しました。就職活動中は大変なことも多いと思いますが、焦らず自分のペースで進めることで、就職活動の軸が見えてくるはずです。頑張ってください！

▷自分の「ここだけは譲れない」という部分を大切に、会社や職種を選んでほしいと思っています。例えば、「絶対に東京で働きたい」「地元を離れたくない」「自分の時間や私生活を大切にしたい」など、人それぞれ、いろいろな基準があると思います。私の場合、それが「地元の近くに住みたい」「人がいい方たちと働きたい」でした。私が考える「人がいい」とは、他者への思いやりがあり、助け合いの心を持っている人たちのことです。河北新報社の社員の方々と関わる中で、まさにそうした人のよさ、温かさを感じました。この人たちとなら、ありのままの自分で働くことができる。そう確信できたことも、河北新報社への入社を決めた大きな理由の一つです。私は、相手の気持ちを深く考えてしまう性格です。周囲の人の態度や雰囲気の影響されやすいので、私を温かく受け入れ気遣ってくださる河北新報社の社員の方々に出会えたことを、とてもうれしく思っています。就活生の皆さんも、実際にその会社で働く社員の方と話してみることで、会社の雰囲気をより深く知ることができると思います。ぜひ、河北新報社の社員の方々とも交流してみてください！ありのままの自分で挑戦できる、素敵な会社だと思います！

▷就活は急かされるものですし、常に試されているような感覚に苛まれることもあると思います。渦中にいる皆さんにとっては、本当に大変な時期ですね。ただ、これほどさまざまな仕事の現場や、普段は表に出てこない過程をじっくり見ることができる機会は、これからの人生でもそう多くはないと思います。新聞に限らず、自分が普段享受しているものが、どんな人たちによって、どんな過程を経て成り立っているのかを知ることが、その過程を支えている人たちに対して謙虚でいることにもつながるはずです。もちろん、結果が気になってしまうのは人情だと思います。それでも、できる限りその「過程」を楽しんでほしいと思っています。河北新報社への入社を考えているかどうかにかかわらず、今の時代に新聞社という仕事に少しでも興味を持っている人には、きっと何か伝えたいことがあるのだと思います。いつか同じ社員として、あるいは別の立場で、その思いを聞かせてもらえたらうれしいです。どうか体と心に気をつけて頑張ってください。陰ながらですが、皆さんの健闘を祈っています。

▷忙しさやプレッシャーなど、就職活動は大変なことばかりだと思います。だからこそ「いま自分が何を大切にしたいのか」「将来どうありたいのか」、じっくりと自分自身と向き合う時間を大切にしていただけたらと思います。私自身、それがなかなかできずに迷走してしまった時期もありましたが、就職活動だからこそ得られた経験や学びもありました。自分のペースも大切にしながら、後悔のないように走り抜けていただけたらうれしいです。心から応援しています！

▷河北新報の記者になれば、社会や経済のニュースを日々追うことで、世の中についての理解を深めることができます。宮城にはバスケットボール、サッカー、野球の三つのプロスポーツがあるので、スポーツを追うこともできます。地域のお祭りやイベント、特産品などを取材すれば、地域の文化についても知識が広がっていきます。

僕は、そのすべてが自分の生活や、これからの人生を今よりもっと豊かなものにしてくれると思います。記者とは、仕事をする中で自分自身の世界も広がる、そんな仕事だと思います。

就職活動の時期が早まり、周りの友達が内定をもらったり、先生から急かされたりすると、どうしても焦ってしまうと思います。僕も、友達の「内定もらった！」という報告を聞くたびに、自分だけ取り残されているような気持ちになりました。そんなときは、一人で抱え込まず、先生や先輩など、頼れる人にはとことん頼ってください。一人で戦う必要はありません。何より大切なのは、自分まで自分を追い込まないことです。就活中だからといって気を張らず、少し息抜きしたって大丈夫です。僕もずいぶん息抜きしました。最後まで、自分だけは自分の味方でいてあげてください。